

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和2年6月25日現在

今月の重点活動

■担い手 兀下大輔氏、中日農業賞優秀賞を受賞！

高山市のトマト農家、兀下大輔さんが第79回中日農業賞優秀賞を受賞し、その授与式が飛騨総合庁舎で行われた。

兀下さんは、県中山間農業研究所で開発された夏秋トマトの養液栽培（3Sシステム）をいち早く取り入れ、栽培期間を従来より2ヶ月ほど延長、収量も2倍以上に増やすことに成功した。生産者仲間や関係機関とも連携し、3Sシステムの普及にも尽力している。また、青年農業士として担い手育成にも貢献し、若手農業者のリーダーとして活躍した事が高く評価された。

農業普及課は、新規就農者が多い飛騨地域にあって、兀下さんに追いつき追い越せる農業者の育成を継続して実施していく。



【中日農業賞を受賞された兀下氏】

売れるブランドづくり

■麦類 大麦の収穫始まる

麦の穂が黄金色に輝く「麦秋」のシーズンを迎えた6月20日、大麦の収穫が始まった。飛騨管内の大麦栽培は、国府町の（農）荒城営農組合が大半を占め、約15haで生産している。今年の冬は、降雪が少なかったため湿害や雪腐病等の生育障害が少なく茎立が良かったため、収量は多く、約30トンの収穫量を見込んでいる。

農業普及課では、JAひだとともに播種日別に水分量や黄熟（色み）具合を確認し、収穫開始日を決定した。品質、収量ともに平年並み以上と予想され、収穫した麦は乾燥・調製した後、7月中旬の検査を経て、麦茶等に加工される。なお、大麦を収穫した後は、ソバの栽培が行われるため、農業普及課では引き続き、栽培指導を行っていく。



【大型機械での収穫】

■飛騨メロン 飛騨メロン研究会 現地研修会を開催しました

飛騨メロン研究会は、旧高山市・丹生川村・久々野町・国府町のメロン生産者で組織され、令和2年4月現在の会員数は16名であり、研究会主催による現地研修会が6月15日に行われた。

研修会では、丹生川町、国府町の生産者ハウスで今年の出来栄えを見ながら、高温・多雨に対応して高品質なメロンを作る栽培管理のノウハウがベテラン農家から説明された。

販路拡大に向けて昨年から県事業で海外輸出に取り組んでおり、昨年は200玉を輸出した。今年も研究会で輸出用の品種を生産しており、農業普及課も協力して販路拡大への取組みを支援する。



【メロンの出来栄えを確認する生産者】

■果樹 各果実組合で摘果講習会を開催

モモとリンゴの摘果講習会が、6月4日に高山市果実組合、8日に国府町上広瀬果樹組合で開催された。

当日は、モモ・リンゴの栽培部長が中心となり、摘果の方法や程度などについての講習を行った。新型コロナウイルスの影響により様々な行事が中止になっている中で、参加した生産者同士の交流もでき、とても良い機会となった。

今年は、霜害がほとんどなかったため生育は順調であるが、果樹のカメムシ類やモモのせん孔細菌病の発生が岐阜県下全域で多発しており、適期防除が重要になってくる。



【意見交換をする生産者】

■古川町大豆生産組合 大豆の播種が始まる

飛騨市古川町内の5営農組織からなる古川町大豆生産組合では、6月7日から大豆の播種（種まき）作業が始まった。例年、播種時期が梅雨と重なるため梅雨の合間をみて7月上旬まで播種が行われる。

農業普及課では、播種作業の開始に合わせて6月8日に開催された栽培研修会で、播種作業時の留意点や雑草対策について説明し、高品質大豆の安定生産に向けて基本技術の徹底を指導した。今後も8月に開催される現地検討会等で指導し、大豆の生産振興に向けて支援を継続していく予定である。



【大豆の播種作業】

■水稲 スマート農業実証ほを設置

農作業の省力化や農作物が持つ能力を最大限発揮させるための環境制御などを目的としたスマート農業技術が全国的に注目を集め、様々な技術が実証されている。飛騨管内でも各地で取組まれているが、白川村では水田センサーと自動止水栓を活用したスマート農業の実証ほを設置した。

水田センサーは水位や地温を測るセンサーと通信機が内蔵されており、インターネット経由で送信される各種の情報により、遠隔地にいながらも水田の状態を把握できる。自動止水栓は、入水は手動となるものの、設定した水位に達すると自動的に水を止めることができる。これらを組み合わせることで、生産者は水管理のために頻繁に水田に行く必要がなくなり、省力化が期待される。

農業普及課では、今後もスマート農業関連技術の実証を行い、省力化を推進するとともに美味しい米づくりへの活用を検討していく。



【水田センサーと自動止水栓】

■スイートコーン 現地研修会を開催

吉城蔬菜出荷組合とうもろこし部会が、6月17日に現地研修会を開催した。今回の研修会には、今年からスイートコーン栽培を始めた新規生産者も多数参加した。

農業普及課からは、高品質な実を収穫するための栽培管理や病害虫対策について説明した。

農業普及課では、今後も栽培研修会や巡回を実施し、収量増加や品質向上を支援していく。



【現地研修会の様子】

■夏秋トマト 集合研修の中止対応として小規模現地研修会を実施

飛騨蔬菜出荷組合丹生川トマト部会は、130名を超える部会員を擁している。例年であれば全員が参加可能な春季研修会を開催し、栽培技術に関する情報提供や部会員相互の情報交換が実施される予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、この研修会が中止されることとなり、各部会員への情報提供が滞る事態となった。

農業普及課は、JAひだ営農指導員と対策を検討した結果、参加者の感染防止をはかった上で、小規模現地研修会による栽培技術情報の提供等を実施した。今後も状況を見ながら、小規模で回数を重ねる活動を展開する予定である。



【現地研修の状況】

■夏秋トマト 清見荘川トマト部会の現地研修会を開催

6月1日に、清見・荘川地域トマト部会の現地研修会が生産者ほ場で開催された。普及指導員、JA営農指導員から、高単収に向けた今後の栽培ポイントや、品種別の定植後の管理方法、栽培履歴の記入方法について説明を行い、その後、生産者同士の意見交換が行われた。

本年度は、普及指導員と営農指導員で清見荘川地域の全生産者を対象として定期的に生育調査を行い、追肥量や着果数等についての技術支援を一作を通して行っていくとともに、蓄積されたデータを今後の栽培指導にも生かしていく。



【研修会の様子】

■パプリカ パプリカの生育調査スタート～最適な肥培管理を探る～

飛騨地域では、平成24年から本格的にパプリカが栽培されており、徐々に面積が拡大している。しかし、土耕栽培における知見が少なく、肥培管理（肥料量の設計等）は手探りでされており、着果が安定しないなどの課題がある。

そこで農業普及課では、肥培管理の適正化を図ることで連続した着果が実現できないかと考え、栽培面積が大きい生産者5戸を対象に生育調査を開始した。

今後は月2回の生育調査を継続し、葉の硝酸イオン濃度などを測定し、生産者と情報共有することで最適な肥培管理指針の作成を目指す。



【生育調査の様子】

■ほうれんそう **自動遮光現地実証ほを設置【スマート農業加速化実証事業】**

農業普及課は6月10日、県中山間農業研究所及び高山市農林部の協力を得て、高山市内にほうれんそうハウスの自動遮光現地実証ほを設置した。

生産現場では温暖化、高温化への対策として、直射日光を遮る遮光資材の導入が進んでいるが、天候や生育ステージ等に応じた遮光資材の開閉は人力で行われており、労力を要している。

自動遮光技術は、中山間農業研究所が開発している技術で、日射量を感知し、遮光資材の開閉を自動化することで、これまで手作業で行っていた作業時間や、点在するほ場間の移動時間の低減が期待できる。

農業普及課は、事業の進行管理役として実証調査に協力し、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。



【内張で遮光資材を設置】

■スナップエンドウ・グリーンピース **出荷物審査会に出席**

吉城蔬菜出荷組合露地部会において、6月5日にスナップエンドウ及びグリーンピースの出荷物審査会が開催された（審査員：部会役員、JA、農業普及課）。出荷物を抜き打ちで審査を行い、当日は、スナップエンドウ15点、グリーンピース8点について審査を行った。

気温が高くなりつつある栽培が難しい時期ではあるが、いずれの生産者も消費者目線の厳しい選別を行っていることが伺えた。

農業普及課では、今後も高品質なスナップエンドウ・グリーンピース生産のため、栽培指導を継続する。



【審査の様子】